

スポーツ オリンピック

陸連にはムリ！ 私なら世界一「公平」な代表選考ができる

池上孝則(東京大学大学院助教)

マラソン代表選考問題が今年も揺れている。かつては五輪開催年の恒例行事であったが、奇数年に開催される世界陸上、五輪の裏の偶数年に開催されるアジア大会でも物議をかますので、今では年中行事ということになる。

今回の福士加代子選手の問題は、アテネ五輪2004の代表選考のケースと酷似している。すなわち、東京国際女子2003で優勝は逃したものの日本人で断トツの一位であった高橋尚子選手が陸連の非公式な内定を受けて名古屋国際女子2004の出場を回避したところ、落選したという事件である。



第35回大阪国際女子マラソン、1位でゴールしたワコールの福士加代子=1月31日、ヤンマースタジアム長居（沢野貴信撮影）

あの事件でも選考システムの不備が大いに議論されたが、今回もまた同種の事件が勃発したということは、少なくともこの12年間、陸連は適切な対策を講じてこなかったということである。

最近の代表選考を振り返ると、混乱を極めた前述のアテネ五輪2004の後、北京五輪2008、ロンドン五輪2012と比較的平穏な選考が続いた。しかし昨年の北京世界陸上2015の女子マラソンの代表選考で、横浜国際女子2014で優勝した田中智美選手を外し、大阪国際女子2015で優勝したタチアナ・ガメラ選手から4分30秒遅れで3位の重友梨佐選手を選ぶという、マーベラスな選考を陸連はやってのけた。体操ゆか白井健三選手の「後方伸身宙返り4回ひねり」を遥かにしのぐ「斜方乱身でんぐり返り7回半ひねり」の超大技を見事に決めてみせたのである。

今までにも物議をかもし選考は数々あったが、陸連の判断を支持する人が一定程度は存在していた。しかし、昨年の北京世界陸上の女子マラソンの代表選考を支持する人はほぼ皆無であろう。

私は、毎年6月に東大で開催している「市民マラソンフォーラム2015」において「私も言いたい！マラソン代表選考かくあるべき！」と題するパネルディスカッションを緊急に企画した。その際、多様な分野からご参集頂いた登壇者がこぞって現在の選考方法に苦言を呈するのは当然としても、議論の最中に司会者が聴衆に対して当該選考に異議があるか否かを問うたところ、なんと参加者の全員が手を上げたのである。

私は、「科学的見地から陸連の選考の間違いを断定できる世界で唯一の研究者」という立場から、代表選考から1週間後の2015年3月18日、陸連に対して公開質問状を送付した。その後、何度か陸連と書面のやり取りがあったが、陸連は代表選考の過程及び理由に関する質問には一切、答えなかった。質問無視を受け、陸連などの公益法人を所管する内閣府に対し、当該公開質問状に真摯に回答する旨の行政指導を求めたところ、内閣府はこの要求に応答しなかった。

そこで、リオ五輪代表決定の日からそう遠くない先に、内閣府に対する訴えを提起する予定である。訴訟内容は、「内閣府が陸連の定款違反に対する行政指導を怠ったことの確認を求める行政訴訟」である。もし裁判所がこの訴えを認容し、内閣府が陸連に対して行政指導を行うことになれば、私から逃げ回っていた陸連を土俵の上に引きずり上げることができる。その時初めて、闇に隠れていた陸連の実体が暴かれることになる。

なお、当該訴状およびその後の事件の経過に関する全文は下記の「ハートフルランナーズ」のWebサイトにアップする予定である。

Webサイト「ハートフルランナーズ」 URL: <http://www.heartful-runners.co.jp/>

しかし、危惧する材料がないわけではない。裁判所が「行政事件訴訟法はこうした事案を予定していない」とか「原告適格を欠く」といった“寝技”を使って却下（いわゆる門前払い）する可能性も否定できないのである。そこで読者の皆さんには、当該行政訴訟が認容されて適式に裁判に係属するよう応援をお願いしたい。

女子代表選考、ペース設定の謎

代表選考問題に言及する前に、何はともあれ、先日、全ての代表選考競技会が終了したリオ五輪マラソン代表選考を振り返ってみよう。

今年のリオ五輪マラソン代表選考会は3月13日に開催の名古屋ウィメンズ2016をもって全ての代表選考競技会が終了し、3月17日の陸連の理事会で正式決定した。大方の予想通り、

◇男子: 佐々木悟(旭化成)、北島寿典(安川電機)、石川末廣(Honda)

◇女子: 伊藤舞(大塚製薬)、福士加代子(ワコール)、田中智美(第一生命)

の6名で決まった。

一見、無風の選考のように見える。メディアもそうした安堵のコメントを寄せている。しかし、今回の選考は選考競技会の結果次第では大混乱に至ったかもしれないという、まさに「奇跡の結末」なのである。

今年の代表選考会を振り返ってみよう。

まず男子であるが、今年の男子の選考競技会は、東京2016が内容的にも記録的にもお粗末なレースであったことで選考という意味では救われた感がある。しかし、もし東京2016が昨年、一昨年の大会のように複数の日本人サブテンランナーが出るような活気のある大会であったとしたら、陸連は複数の有力候補選手を対象として誰もが納得できるような選考ができたであろうか。

今回のリオ五輪の代表選考要領では、評判の悪かった「原則ナショナルチームの所属者」という項目が外され、「各選考競技会での記録、順位、レース展開、タイム差、気象条件等を総合的に勘案し」という一文が追加され、お約束の「本大会で活躍が期待されると評価される競技者」という言葉で締めくくっている。（※アンダーライン部分が世界陸上2015の選考要項から追加）。外圧を受けて多少は進歩したものの、相変わらずの陸連の裁量権満載の不透明極まりない規定である。

しかし後で詳しく述べるが、陸連はこうした複数の要件を総合的に勘案して異なる大会のパフォーマンスを評価する能力を全く有していない。おそらく上記のような事態が発生した場合には、選考委員の経験と勘、そして利害関係者の思惑がぶつかり合う熾烈な代表選考になったに違いない。



五輪女子マラソン代表の最終選考会を兼ねた名古屋ウィメンズマラソンで、日本勢トップの2位に入った田中智美。後ろは3位の小原怜＝3月13日、ナゴヤドーム

一方の女子であるが、埼玉国際女子2015が記録的に低調だったこともあって大阪国際女子2016及び名古屋ウィメンズ2016を加えた三体問題とはならず、これまた無風の選考となった。しかし、よく考えてみてほしい。もし田中智美選手と小原怜選手の記録が実際の記録より1分10秒早く、福士加代子選手の大阪の記録を上回っていたとしたら、女子の選考は一体どうなっていたであろうか。これは決して有り得ないことではない。3月13日の気象条件は絶好であったこともあり、レース展開一つで2人以上の日本選手が福士選手の記録を上回る可能性は十分にあったと見るべきであろう。

しかし名古屋ウィメンズ2016では、レースは17分/5kmのペースで進んだ。これではフィニッシュタイムが2時間23分28秒になる。このペースでは優勝したユニスジェプキルイ・キルワ選手自身が持つ大会記録（2時間22分08秒）も福士選手の大阪女子2016での記録（2時間22分17秒）も破ることはできない。実際、キルワ選手は途中で焦れる様子を見せていた。

あの好コンディションの中で、なぜ大会記録より1分20秒も遅いペースが設定されていたのか？ この疑問に関し、陸連は代表発表後に厳しい追及に曝されることになるであろう。もしこの件に陸連が関与していたことが明らかになれば、陸連こそ“下種の極み”である。真相次第では大きなスキャンダルに発展する可能性がある。

おそらく今回のペース設定は日本選手が福士選手の記録を上回らないようにする為の配慮だったと思われるが、そういった意味では名古屋ウィメンズ2016は陸連の思惑通りに事が運んだ。

しかし、もしこうした意図に反して複数選手が福士選手の記録を上回った場合、はたして陸連はどのような選考をするつもりだったのであろうか。陸連の設定記録を突破しているという点では選考対象の選手が同じ評価なので、常識的に考えれば次の考慮事項として「各選考競技会の日本人トップ」という論理が優先しそうである。しかしこうした規定は選考要項のどこにも謳われていない。もし名古屋ウィメンズ2016で田中選手と小原選手が福士選手の記録を上回っていた場合で、福士選手を選考する動きになったとき、優勝から4分半遅れで3位の重友選手を代表にねじ込んだ剛腕の天満屋・武富総監督がこの選考に納得するであろうか。

その一方で、今回の代表選考では「陸連が福士選手の名古屋出場を止めた」という経緯がある。ワコールサイドも血相変えて陸連に詰め寄るであろう。舞台の表（国民の間）でも裏（陸連内部）でも骨肉相食む熾烈なバトルが展開されることになる。話し合いで折り合いがつかような事件ではないので、訴訟問題に発展するかもしれない。

更に、もし名古屋ウィメンズ2016でデッドヒートを制したのが小原怜選手であったとしたらどうだろう。この場合には、間違いなく天満屋と第一生命の遺恨は更に深まることになったであろう。そして、当然ながら北京世界陸上2015の問題が蒸し返されることになり、当事者はもとより、陸上界全体の苦い記憶としてくすぶり続けることとなる。

今のマラソン代表選考は、2、3年に一度程度の軽度の地震でもメルトダウンしてしまう原発のような脆弱なシステムなのである。そして今回の代表選考は、“大事故と紙一重の奇跡の結末”であり、決して結果オーライで締めくくってはならない問題なのである。

更に、決してそう思いたくはないのだが、もし陸連が日本人選手の一位の記録を抑えるようなシナリオを描き、大会がその流れに沿って進行していたとしたら、“陸連の演出によって汚された代表選考”ということになる。

もしマラソン代表選考におけるこれらの本質的な問題の解決がまたまた先送りされるようなことがあるならば、スポーツの根幹にかかわる公平性の問題を長年に亘って解決できない御頭（おつむ）のお寒い国民に対する嘲りの視線の中で五輪のホスト国を務めることになるであろう。

一発選考に立ちはだかる既得権の壁

代表選考の問題点に言及する前に、自分の立場を明らかにする意味で「一発選考か複数大会選考か」という問題に触れておく。

選考システムに関しては、私は断然、複数大会選考派である。つまり、現状のシステムを是とする考え方である。理由は2つ、「おもしろい」ということ、そして「現実的」ということである。もちろん、「フェアタイムの活用によって公平な選考が実現できる！」ということが複数大会選考を主張する技術的背景としてあるが、ここではその議論は割愛する。

選考競技会は時期もコースも気象条件も異なる大会で開催される。こうした異なる舞台の上で、鍛え上げた選手がその条件と対話しながらベストの結果を出すべく能力の全てを傾注するのであるから、これがおもしろくない訳がない。市民ランナーにとっても、マラソンの奥深さに触れる絶好の機会である。しかも複数大会選考となれば、代表選考に係る選手と一緒に走れる市民ランナーもぐっと増える。同じ大会でエリートランナーと一緒にアップしているときなど、泡沫市民ランナーの私にとっては至福の瞬間である。一発勝負派の人達には「市民ランナーの楽しみを奪わないで！」と言いたい。

マラソン大会は既得権の塊である。選考レースが複数ともなれば、陸連の実入りが多くなるのは当然として、各大会の主権者にとっても、参加選手の質と量、観客動員数、視聴率、協賛金、放映権、関係者のモチベーションなど冠大会のメリットは甚大である。もし一発勝負ということで話が進んだとしても、この既得権の壁を切り崩すには相当の覚悟が必要であろう。

選手にとってもメリットが大きい。自分の体調と他の選手の動きに合わせて複数回のチャンスが与えられる。実業団を保有する企業も協賛する大会に所属の選手を出場させたいであろう。ただし、一発勝負を望む選手も少なくないので、この観点に関しての断定は避ける。

代表選考におけるリスクヘッジという意味でも複数大会選考方式が優る。選考レースとしても異なる条件から選手の選考ができるので異なるタイプの選手を選考することができる。世界大会の傾向を見ても、エース格の選手が力を発揮できていないのに対し、這い上がった選手が結果を出していくことから見ても、複数大会選考がリスクヘッジになっていることは確かである。

私は基本的に複数大会選考派ではあるが、一発勝負が実現するならそれに異論を唱えるつもりはない。しかし、一発勝負を実現するには相当なパワーが必要である。一発勝負を主張する人は、ただ建前論を声高に叫ぶだけでなく、是非、行動に移してほしい。そして、一発選考のビジョンおよびスケジュールを明確に示してほしい。

私は代表選考問題を解決するために12年の歳月をかけて外堀を埋め、本丸に打ち込む強力な大砲を開発し、そして体を張って闘いを挑んできた。一発選考派の人にこうした執念と行動力、そして何より多数派を形成し得る規格外の知恵があるのかどうか、はなはだ疑問である。

代表選考、4つの問題点

ここで、マラソン代表選考における問題点を整理しておこう。代表選考の問題点を一言で言えば、「陸連の陸上競技を独占的に統括する当事者としての資質の欠如」ということである。陸連の資質に関する具体的項目として「パフォーマンス評価能力の欠如」、「反法治主義的体質」、「反民主主義的運営」、そして「公人義務違反」という4つの視点で論じることとする。

現状における代表選考における第一の問題点は、陸連の「パフォーマンスの評価能力の欠如」である。現在、日本は複数大会から代表を選考するシステムであるが、このシステムが成立するためには異なる条件下のマラソンのパフォーマンスを公平に判断できる能力が必要なことは言うまでもない。しかし陸連は、研究者の集合体であるにも関わらず、パフォーマンス評価能力は極めて脆弱である。それゆえに、先の世界陸上2015の田中智美選手と重友梨佐選手の場合のように、たった二人のパフォーマンスの優劣を判定することができないのである。

北京世界陸上2015の記者会見で酒井勝充強化副委員長は、「われわれもプロとしてやっている」と発言した。しかし、人並みの能力しか持ち合わせていない彼らは、決してプロとは言えないのである。ただし、陸連の名誉の為に申し上げるが、これは陸連だけの問題ではなく、私以外の世界の全ての人に共通する能力の限界なのである。したがって、この点に関して陸連を糾弾すべきポイントは、自分達の仲間以外の研究成果を受け入れることのできない陸連の「村社会体質」である。

マラソンのパフォーマンスの評価という課題に対し、私はカルバリン砲を遥かにしのぐ“VMS砲”を有している。ちなみにVMSとは「仮想測定系システム (Virtual Measurement System)」のことである。マラソンの記録をVMSで処理した結果が「フェアタイム」である。フェアタイムとは、「異なる条件下におけるマラソンの記録を同じ条件下の記録として変換した値」であり、これを別の視点で言い換えれば、「ランナーの真のパフォーマンスを表す値」である。フェアタイムは、前述のWeb サイト「ハートフルランナーズ」で誰でも知ることができる。

Webサイトを開設した当初は情報提供大会がエリート大会8大会であったが、現在では80大会(国内71大会、海外9大会)まで増えており、各々の大会の過去3大会分のフェアタイムが検索できるようになっている。現在、フェアタイムの精度は目標である0.1% (2時間10分なら±7.8秒) に迫っており、十分に実用に耐えるレベルにある。

ここで、任意の二人のランナーのパフォーマンスを相互に比較する組み合わせの数Nを計算した場合、フィニッシャーの数をnとすると

$$N = n(n-1) / 2 = 1.4 \times 10^6 \times (1.4 \times 10^6 - 1) / 2 \approx 10^{12}$$

すなわち一兆の組み合わせが存在する。

諸説はあるが、天の川銀河の恒星の数が約2000億から4000億、地球から観測可能な銀河の数が数千億とか言われているようであるから、“一兆”という数字は超天文学的数字であることは間違いない。この一兆の組み合わせにおいて、サブテンのランナーから7時間でゴールに飛び込んだランナーに至るまで整合性が保たれている。ちなみに整合性とは、「辻褄が合っている」ということである。



話を戻そう。先ほど、陸連はたった二人のパフォーマンスを科学的に判断することができないという話をした。その一方でフェアタイムでは、一兆の組み合わせに対して矛盾なく定量的にパフォーマンスの比較ができるのである。私はこの差を称して、「陸連とVMSとは、サッカーで言えばレアル・マドリードと幼稚園ひまわり組ほどの差がある」と言っている。レアル・マドリードは「バルサ」の方がいいかもしれないが、いずれにしても比較の対象外であるほどの能力差であることはご理解頂けると思う。これが、私が陸連を“上から目線”で見ている理由である。

なお、従来の研究と VMS の違い等の詳しい解説は前述の行政訴訟における準備書面等に詳しく書く予定なので、そちらを参照して頂きたい。

代表選考における2番目の問題は、陸連が「反法治国家的体質」であるということである。

陸連が発表している「第31 回オリンピック競技大会(2016/リオデジャネイロ)マラソン代表選考要項」に「選考方針」、「選考競技会」、「選考基準」等が記載されている。この中で特に問題となる部分は、選考基準(2)の2)で、「各選考競技会での記録、順位、レース展開、タイム差、気象条件等を総合的に勘案し、本大会で活躍が期待されると評価された競技者」としている点である。つまり、代表選考において陸連に大きな裁量権が与えられているのである。

ところで、先ほど私は「陸連にはパフォーマンスを評価する能力がない」ということをお話した。いくら記者会見で「プロとしてやっている！」と見栄を張っても、所詮、彼らの武器は経験と勘しかないのである。その陸連に強力な裁量権を与えているのであるから、どうなるかはすぐに察しがつくであろう。

更に面倒なことは、陸連の組織の問題である。つまり、選考に係る選手が所属する実業団の監督等が選考に関与しており、自分達に都合な選考理由を自在に作り出しているということである。要するに「選ぶ者と選ばれる者の区別がなくなっている」。受験生が入試の解答を採点するようなものである。

こうした内部の構造的矛盾を隠蔽するためであろうか、世界陸上2015 での記者会見を振り返ってみると、「この人はボケ老人ではないか？」と思うほど耳を疑う説明が次々と飛び出してきた。例えば、田中智美選手が優勝しながら落選した理由が「外国選手が弱かった」であったり、重友梨佐選手を選んだ理由が「途中までトップグループにいた」であったりする。

もちろん、外国選手の力量に関するようなバカげた規定はマラソン代表選考要項のどこにも書いてない。もしそうであれば、弱い外国選手しか出ない大会では優勝しても代表にはなれないということになる。そして何より、この発言は女子マラソンを牽引してきた横浜国際女子の関係者にとってはなほだ失礼な発言であるし、そもそも陸連自らが主催する大会でそんな自己否定するようなことがよく言えるものである。



第6回横浜国際女子マラソン 34キロ付近、先頭集団で併走する(左から)4位のロティチ、優勝の田中智美、3位の岩出玲亜、2位のフィレス・オンゴリ=2014年11月16日午後、神奈川県横浜市(代表撮影)

普通の人間なら決して口に出さない選考理由が記者会見という公の場で次々と口をついて出てくる。これが日本の陸上スポーツのリーダーの言葉であると思うと、ただただ悲しくてならない。レース展開にしても、陸連は「先行&玉砕型」がお好みのようなのだが、マラソンには様々なタイプがあって、それがおもしろいのである。

確かに優勝を争うということであればトップグループかそれに近いところにいなければならないかもしれないが、世界との差が余りに大きい今の日本では、自分のペースでマラソンを走り切る方が最終的なパフォーマンスがいいのは当たり前である。もし”先行逃げ切り”しか評価されないようであれば、私のような落ちこぼれで遅咲きの人間は全くチャンスは与えられないということになる。日本がそうしたシステムの国であったなら、人類はVMSを手にする事ができなかったということである。

法治主義では、権力の暴走、権利の濫用を法が規制する。ただし、法治主義では、法は過去の事例に遡及しない。脱法ハーブがそうであったように、常識的には限りなく黒に近い事例であっても、立法化されていない段階では法律的に取り締まることができない。おかしいと言えばおかしいことだが、人間が絶対的な基準軸を有していない以上、法治主義のシステムは次善策として受け入れざるを得ないのである。

代表選考における陸連の反法治国家的体質とは、選考要項において陸連の裁量権が幅広く認定されており、独善的あるいは恣意的判断を規制できない諸口となっていることである。これを分かりやすい言葉で言い換えると、「陸連は後出しジャンケン可」ということである。

この問題の対策は簡単である。要するに、陸連の裁量権の幅を限りなく狭くするように選考要項を書き換えればいだけの話である。すなわち、事前にありとあらゆる場合を想定してルールを規定しておけば、混乱は絶対に起こらないはずである。つまり、陸連は事前のルール作りを緻密に行い、実際の選考はルールが決定するのである。

例えば、びわ湖毎日2016で川内優輝選手には「2時間6分30秒を切らない限り優勝しても選考の対象外」という酷な条件が課せられていた。しかし、選考要項に「初回の選考競技会を評価の対象とする」旨の規定があり、これは「全ての選手にチャンスは一回だけ与えられる」というルールを成文化したものと考えられるので、彼も納得できるのである。

野球では膨大な量の「野球規則(いわゆるルールブック)」を定め、多様な野球場における試合の整合性を保っている。野球の試合は見た目には審判が裁いているように見えるが、実は野球規則が裁いているのである。野球規則を制定する手間に比べたら、マラソン代表選考のルールなど訳ないことである。そして、選考のルールを規定することはパフォーマンス評価能力が欠如している人でも出来ることなのである。私もこの件に関しては長く言い続けていることではあるが、こうした当たり前のことができないのが不思議でならない。選考要項を整備することによって陸連に何らかの不都合が生じるからだと勘繰らざるを得ない。

代表選考に係る3つ目の問題は、選考が「反民主主義的運営」という点である。この問題は、前述の世界陸上2015で「誰もが首をかしげる選考はいったいなぜ起こったのか」というこの疑問を糸口にして陸連の組織について考えてみよう。

世界陸上2015及びリオ五輪2016のマラソン代表選考では、選考方法の手続きに関し、「全ての競技の終了後、編成方針及び選考基準に則り、強化委員会にて原案を作成し、選考委員会で選考し、理事会において決定する。」と規定されている。

私は、先に、市民マラソンフォーラム2015で開催した緊急企画のパネルディスカッションで、参加者全員が北京世界陸上の選考に対して異議を唱えたという事実を報告した。当該パネルラーは意識の高い人の集まりだったかもしれないが、代表発表直後の記者会見での質疑応答や SNS での書き込みも圧倒的多数が陸連の選考に異議を唱えているのである。

陸連の理事は、特殊な思考構造を持つ偏屈者の集合体でないであろうから、大多数は田中智美選手を選ぶべきだと考えていたに違いない。したがって、もし世界陸上2015の選考が理事会で理事の総意を集約した結論であれば、重友選手の選考はあり得ない。ではなぜ、ふなっしーが船橋から石垣島までぶっ飛んでいくような結論が出たのであろうか。

特別な推論をするまでもなく、理事会が適式に機能していなかったと思われる。先の選考は、強化委員会の原案作成時、またはせいぜい強化委員会での選考時に基本方針が決定しており、理事会に諮られる時点では覆せない状況になっていることが想像できる。つまり、理事会が“出来レース”になっているということである。陸連の内部において、民主主義的手続きが担保されていないのである。

公益財団法人でありながら、民主的な手続きに則って与えられた権利が行使されていないということであれば、所管

官庁が陸連の公益法人格をはく奪するしかない。先の行政訴訟が認容され、内閣府が陸連に対して行政指導を行った暁には、この点に関しても明らかにしてゆきたい。

日本陸連は、税制等で優遇される公益財団法人、すなわち公人であるから、その社会的責任は重く、その活動に対して国民から厳しい目が向けられるのは当然のことである。ここでは、「説明責任」および「結果責任」という側面から陸連の行動を検証する。

政治家がその活動に関して疑義をもたれた場合、その疑惑を晴らすための説明責任があるのは当然である。その際、もしその政治家が国民を十分に納得させるだけの説明ができなければ、政治家自らが責任をとるのは当然のことと考えている。最近でも甘利明氏は金銭授受問題で経済再生担当大臣を辞任しているし、宮崎健介議員はスキャンダルによって衆議院議員を辞している。

陸連は今までの数々の疑惑に対して納得できる説明を一切してこなかった。今回の世界陸上代表選考に係る私の公開質問状に対しても、陸連との往復書簡(Webに掲載中)から明らかなように、全く回答していないのである。

もし政治家が職務に関する疑惑に対して説明を拒否あるいは黙秘すれば、ほぼ100%、政治生命は断たれるであろう。しかし陸連は、繰り返し送付した督促状を無視し続け、しかも何食わぬ顔で平然と生き延びているのである。矛先は違うが、こうした事態に対して陸連に対する行政指導を求めた内閣府も、私の申し出を無視したのである。この国は一体、どうなっているのだろうか。

国民栄誉賞まで受賞したなでしこジャパンの佐々木則夫監督も辞任ということになった。公人は、ただ身ぎれいなだけで務まる訳ではない。活動の結果に対しても厳しい結果責任が問われるのである。

陸連は、日本の陸上競技界を代表する唯一の存在としての地位を与えられており、日本代表選手の選考を含む主要な権利を独占している(陸連定款参照)。これだけの独占排他権を付与されている公益財団法人であるが故に、陸連が負っている結果責任は極めて重いのである。

それにもかかわらず、日本の陸上界は長期低落の一途をたどっている。北京陸上2015ではあわやメダルゼロの瀬戸際まで追いつめられる惨敗を喫した。最近の日本選手権でも生きのいい若手が育っておらず、世界では全く通用しないベテラン選手の連覇が目についた。特権的な地位を与えられて仕事をしている以上、結果責任が問われるのは当然である。陸連も、本来なら北京世界陸上の結果を受けて、原田康弘強化委員長だけでなく幹部は総辞職のはずである。もしリオ五輪でメダルがゼロなら流石に続投する幹部はいないだろう。

以上、マラソン代表選考に関する陸連の資質を「パフォーマンス評価能力の欠如」、「反法治主義的体質」、「反民主主義的運営」、そして「公人義務違反」という4つの視点で論じた。

ここで指摘した問題点は、パフォーマンス評価能力を除き、法治主義、民主主義といった先進国の基本的要件に対する背任行為である。日本のスポーツ界で指導的地位にあるはずの陸連がこうした状態であることに、我々は強い危機感を持たなければならない。

問題解決には知的にパワフルに闘うしかない

「保育園落ちた日本死ね！」の書き込みが話題になっている。この問題と代表選考問題に特別な接点はなさそうに見えるが、問題解決のアプローチという切り口において共通性が垣間見え、そして潜在的な危険性を感じている。そこで「日本死ね！」をキーワードに問題解決のアプローチについて考えてみることにする。

「保育園落ちた日本死ね！」の書き込みが賛否を含めて大きな反響を呼び、政界まで動かそうとしているのは、待機児童の問題が緊急の解決課題である少子化問題とのからみもあって、大きな社会問題であるからであろう。しかし日本には待機児童問題と同等、あるいはより深刻な問題が山ほどあり、その当事者は誰も厳しい現実にはさらされて生きているのではないだろうか。

たとえば基地問題を抱える沖縄の人は、「小さな沖縄に基地の3/4も押し付けやがって、沖縄を何だと思っているんだ、日本死ね！」だろうし、TPPで危機に追い込まれる農業関係者は、「農家を殺す気か、日本の農業を殺す気か、日本死ね！」だろうし、将来のシナリオが描けない契約社員は「結婚も出来ない、子供も産めない、俺には未来はない、日本死ね！」だろう。つまり、「日本死ね！」と叫びたい人は山ほどいるということである。

もしそんな日本人の皆がみんな「日本死ね！」と言い出したら日本はどうなるのだろう。それもさることながら、「日本死ね！」で政治が動くとしたら、それはもっと怖いことだと思う。

客観的に日本を見てみよう。日本は戦後70年、戦争に関与してこなかった。世界標準で見ると、これはいい意味で異常である。また、言論の自由などの基本的人権も尊重され、識字率は高く、治安のレベルも良好で、落とし物もほぼ手元に返ってくる。しかも、国民皆保険制度も整っており、特別な病気や事故がなければ80年以上は生きられる。

もし私が神様なら、こういった国家に対しては黙って70点の部分点をつける。90点でもおかしくない。残りが内政問題での配点である。言わずもがなであるが、我々は、日本人であることに感謝し、そうした国家を作り上げた先人に敬意を表してもバチは当たらないだろう。



私が子供のころは、背中に子供を背負って農作業をする女性の姿を普通に目にしていた。母親が私を生んだとき、農繁期ということもあったが、出産の前日まで働いていたそうである。母親は、8人家族の中で唯一の女として、朝早くから夜遅くまで身を粉にして働いていた。昔の女性の生活環境は過酷で、60歳そこそこで腰が曲がっている人が沢山いた。

父親も、仕事から帰ると夜の8時9時まで当たり前のように野良仕事をしていた。私がたとえビッグネームになったとしても、両親には到底かなわないと思っている。

そんな両親を見て育ったので、私は贅沢はしない、我がままは言わない、無いものねだりもしない。そして、「あるもの、手に入るもので何とかやりくりする知恵」と、「不条理に対しては体を張って闘う性格」が自然に身に付いた。世界で唯一の研究に手本など全く存在しない。泣いても喚いても誰も助けてくれない。研究という場で私のこうした性格や考え方は大いに役立っている。「時代が違う」というかもしれないが、それは違う。今でも、貴方よりも過酷な環境で子育てをしている人はいくらでもいる。

社会の不備に罵詈雑音(ばりぞうごん)を浴びせて噛みつく前に、まず問題を解決するための知恵を出してみよう。なぜなら、貴方にはこれから様々な問題が次々に降ってわいてくるのであり、それをその度、自分自身で解決しなければならないからである。

貴方が当面の危機を乗り切ったら、その次に、あなたが直面した問題の解決のために行動することである。なぜなら、あなたは当事者だから誰よりも問題の深刻さを理解しているはずであり、誰よりも辛抱強くこの問題に取り組めるはずである。貴方は、60歳になって腰が曲がることはないであろうし、特別なことがなければ80過ぎまで生きていける。飢餓に瀕した国で暮らしているわけではないので、貴方の体は不条理と闘うに必要な十分の栄養が行き渡っている。闘う準備は整っているのである。

さあ、闘おう！ 貴方が忌み嫌う不条理と闘おう！ でも、民主主義は手続きである。だから、必要な手続きをきっちり積み上げていこう。

私も陸連や内閣府に対して、繰り返し督促状を送付している。こうした、一見、無駄で非効率に見える手続きが、大勢の人の利害が錯綜する社会では必要なのである。しっかりと手順を踏んで問題の絡んだ糸束を根気強くほぐして欲しい。

繰り返し言うが、「日本死ね！」が最終結論であるなら、物事は何も成し遂げられないであろう。もし日本がそうした一言で動く薄い国であれば、国として世界で名誉ある地位を占めることはできないであろう。問題に遭遇したら、クールジャパンの国民らしく、知的に、そしてパワフルに闘っていこう。泣き言を言ったり、叫んだりしていても津波に飲み込まれるだけである。

たとえば東京五輪2020であるが、国民は推進派の人たちの粗探しばかりしているように見える。日本には“セバスチャン・コー”がいないことは確かなのだが、だからこそ一人ひとりの資質の底上げが必要なのである。

マラソン代表選考への“我が闘争”

本章では「マラソン代表選考における”我が闘争”」を紹介する。「我が闘争」は、言わずと知れたナチス党首アドルフ・ヒトラーの自伝の邦名であるが、語呂の面白さと本稿の内容とのマッチングのよさでタイトルとして選択したままで、もちろん私が彼を崇拜している訳ではない。むしろ、彼に踊らされた大衆へのアンチテーゼとしてこのタイトルを使用したまでのことである。「日本死ね！」を書いた人も、そのブログに同調する人も、私がこのマラソン代表選考問題に対峙して歩んできた12年間の話は参考になると思うので、腰を据えて私の話を聞いてほしい。



第24回東京国際女子マラソン、ゴール直後係員に抱えられ、一瞬苦しそうな表情
を見せた高橋尚子選手＝2003年11月16日、国立競技場（奈須稔撮影）

私のマラソンの研究はアテネ五輪2004の代表選考の日から始まる。私自身も市民ランナーとして出場していた東京国際女子2003は季節外れの猛暑に見舞われた。そんな過酷な気象条件の中で高橋尚子選手は、終盤に失速して優勝を逃したものの、日本人2位の嶋原清子選手に4分近い大差をつけ2時間27分21秒でゴールした。しかしアテネ五輪代表選考では、シドニー五輪金メダリストでマラソン6連覇中であつた高橋選手は落選した。東京国際女子2003が超劣悪な条件であつたことは一切考慮されず、記録と順位だけを根拠とするアンフェアな選考であつた。

私はこの選考に対し、表現し難い怒りを覚えた。高橋尚子選手と同じあの過酷な条件下のレースを私も走っている。あの猛暑を体全体で知っている。しかし、陸連の選考委員は、誰一人として東京国際女子2003を走っていない。「クーラーの効いた部屋でTVの画面を見ていたやつに何が分かる！」そういった怒りがこみ上げていた。マラソンを一度も走つたことのない”知識人”が表面的な情報だけで陸連の判断を支持するコメントを寄せたことにも向かつ腹がたつた。よくは覚えていないのだが、きっと「陸連死ね！」とか「バカメディア死ね！」などと思っていたはずである。

怒りが収まらない選考の日の夜、悶々とした気持ちと対峙しながらじっくり考えてみた。感覚としてではあるが、自分にはあの選考が明らかに間違っていることは分かっている。同じ大会に出場した私の仲間も同じ意見である。

しかし、私が著名人やエリート選手だったら世間で多少は聞く耳を持つ人がいるかもしれないが、私ごときの泡沫市民ランナーが不公平を口に出して騒いだとしても何の影響力もないであろう。

何の影響もない。何も変わらない。

確かにその通りなのだが、もしここで何もしないでこの事件をやり過ぎたとしたら、この先ずっと自分の気持ちを裏切ったことに負い目を感じて生きていくことになるだろう。何もなかったことに対する精神的な屈辱感は、一生、自分を蝕み続けるに違いない。直観的にそう思った。

ここからが貴方と違う。私は「陸連死ね！」と叫ぶようなことはしなかった。その代わりに、翌日から全国の大会主催者を訪ね、資料を収集した。ほとんどアポなしである。何の面識もない、どこの馬の骨ともわからない者の、何の勝算もない申し出に、大会主催者は資料提供の申し出に応じて下さった。

それらの資料を基にデータ解析を始めて一週間ほどが経過したとき、斬新な発想が浮かぶ。それが、異なる条件下の測定値の定量的な比較を可能とする「仮想測定系システム(VMS)」の原型である。その年の5月、東大本郷キャンパスの学園祭である五月祭で代表選考に関するイベントを開催する。教室の一室を使い「マラソン代表選考は正しかったのか？」と題したこのイベントは、私の解析結果を発表し、アテネ五輪代表選考の間違いを世間にアピールするものであった。ちなみに、このイベントを開催した時点で代表選考の日から2月余りしかたっていない。

アテネ五輪直前の2004年8月に開催された日本陸上競技学会では、2枚しかない口頭発表のうちの一枚をもらって発表している。この大会のエントリー締め切りは2004年5月だったと記憶している。私の本来の研究は、AI(人工知能)や知能ロボットであるが、マラソンの研究に次第に軸足を移していくことになる。

その後も、何とか自分の理論を普及させようと思い、複数の学会で気が狂ったように発表を続けていった。しかし、ささやかな賞をくれた学会があることはあったが、従来の方法論と余りにもかけ離れた考え方のためか、反応は概ね芳しくなかった。

闘いには武器が必要である。それは、知識を身に着けることでも、スキルを磨くことでも、体を鍛えることでも何でもいい。とにかく、相手に勝る武器が必要である。私は、新しい課題を解決するとき、必ずといっていいほど新しい武器を作り出してきた。

私の武器は、科学という道具を使って作り出される。それは、例えば理論であったり、アルゴリズムであったり、方法論であったり、モデルであったり、システムであったり、デバイスであったり、装置であったりする。武器の中でも、新兵器は特に威力を発揮する。なぜなら、相手はそれを手にしていないので、対策を講じようがないからである。郷土の伝説的棋士である升田幸三氏は「新手一生」を生涯の信条としていた。新手こそ勝負の極意である。

もちろん、口でいうほど新兵器の開発は尋常な道のりではない。例えるならば、暗闇のジャングルで出口を見つけるようなものである。フロントランナーなら誰も味わう孤立無援の世界である。

詳しい経緯は割愛するが、ともかく私は問題の解決に迫る“新兵器”を発明した。それがVMSである。私は、10年の歳月と10,000を超すアイデアのトライ・アンド・エラーにより、VMSを初期の怪しげな珍品から最新鋭の「21世紀型カルバリン砲」へと変貌させた。現在、陸連を反論できない状況に追い込み、子供を窘めるように陸連と対峙できるのは、この新兵器による効果が大い。

闘いを城攻めに例えるなら、まず相手の城の外堀を埋める必要がある。つまり、自分の理解者を増やし、相手の勢力範囲をじわじわと狭めていくのである。

フェアタイムが世の中に普及し、誰もがフェアタイムでパフォーマンスを確認するようになれば、陸連はフェアタイムが示唆する結果と相反する結論は出せなくなるはずである。つまり、陸連を「裸の王様」状態にしてしまうのである。この目的を達成するために、Webサイト「ハートフルランナーズ」を開設し、誰でも無料でフェアタイムを検索できるシステムを構築した。

更に、全国の大会を駆け回り、掲載大会数を増やすことに努めた。田中角栄ではないが、なんてったって“数は力”である。Webサイト開設当初は情報提供大会がエリート大会8大会であったが、現在では80大会まで増えてきた。情報提供するフィニッシャーの数は140万人に達している。私は、大会を規模で区別しない。出場者数が35,000人の都市型の巨大マラソンも、1,000人に充たない小規模の大会も同等に扱っている。マラソンに寄せる情熱は同じだからである。

利用者の信頼を勝ち取るには、フェアタイムが十分な精度を有していなければならない。研究開始当初のフェアタイムは、定量的に評価した訳ではないが、研究開始当初はかなりの不確かさが残存していたのではないと思われる。しかしそれから10年の歳月をかけ、100以上のマラソン大会に出場し、10,000のアイデアを超す試行錯誤により、フェアタイムの精度は0.1%のレベルに達しつつある。精度の向上、そして安定した再現性は、フェアタイムの普及においても大きな力になった。

巷に溢れている数字情報は、実はすべて嘘っぱちである。そもそも「95%の人が美味しいと言いました！」なんて数字は、データの収集の仕方と処理によって如何様にもなるのである。したがって、本来なら提供する数字に不確かさを付記して情報を提供しなければならないのであるが、知識不足と不都合な事情があるので、世の中の人は誰もそれをやらない。

私は、情報を提供する者の義務という観点から、精度を付記して提供するようにした。フェアタイムが科学的データであることの証である。現在のフェアタイムは、精度（95%信頼区間）が併記されて提供されている。工業製品では製品に不確かさを付記して表示するのは普通であるが、一般の情報で精度を付記して表示しているのは見たことがない。このように、不確かさを付記する情報提供形態ということに関してもフェアタイムが世界初であろう。

更にシステムは進化を続け、フィニッシュタイムを他の大会の記録に変換する「フィニッシュタイム変換システム」を開発した。これは、もしあなたがどこかの大会を完走したとしたら、そのフィニッシュタイムを他の大会の記録として変換できるという“驚愕のシステム”である。たとえば、東京マラソン2016を走った人は、フィニッシュタイム変換システムによって千歳 JAL、いわきサンシャイン、篠山ABC、高知龍馬、青島太平洋といった各地の大会に仮想的に出場することができるのである。

更に、アテネ五輪2004、北京五輪2008等の世界大会にも出場することができるし、またその逆に、アテネ五輪で優勝した野口みずき選手や、北京五輪で驚愕の記録で優勝したサムエル・ワンジル選手がその時のパフォーマンスで各地の大会を走ってもらうこともできるのである。

私は、相互に変換されたこれらのフィニッシュタイムを、時空を超えて飛び回るSFのワープとの連想から「ワープタイム」と命名した。ランナーの皆さんは、フェアタイム、ワープタイムを活用してマラソンを100倍、楽しんでいただきたい。

震災から3年が経過した2014年には、復興支援のファンドを募る目的もあって第1回の「市民マラソンフォーラム」を開催する。私は日ごろからVMSを地球の未来の為に使いたいと思っており、「市民マラソンフォーラム」はその第一歩である。将来的には、この市民マラソンフォーラムを母体として、災害支援、森林の保護、若者の支援、ボランティアの支援等を行うための、献金に頼らない強いファンドである「ハートフルランナーズファンド」を立ち上げたいという構想を持っている。

このように、私は常に新しいテーマに取り組み、新しいものを作り上げてきた。「変わるもの、創造性のあるものだけが生き残る」、そんな危機感を私は常に持っている。

「機に発し、感に敏なること」とは、極真道場の道場訓の一節である。私が西池袋の道場に通っていたころ、最も心に沁み込んだ言葉の一つであった。その意味は、「状況の変化に機敏に対応せよ」ということであり、「その為に普段の準備を怠るな」ということでもある。ここでは、アテネ五輪後の対応のような、代表選考問題でとった機に敏なる対応の幾つかをご紹介します。これは、危機意識がなく改革の意欲に乏しい陸連へのアンチテーゼでもある。

私は、北京世界陸上2015の代表選考があった2015年3月11日の翌週に当たる3月18日に公開質問状を陸連に送付している。しかも、第一生命サイドが日本スポーツ仲裁機構(JSAA)に異議申立をしないと見極めたときには既に4日が経過しており、この手の事件の賞味期限が1週間だとして、残された時間は3日しかなかった。その時間で全体の構想をまとめ、文章化して推敲し、執筆開始から2日半後に陸連に質問状を送付している。更に、陸連にはその旨のFAXを入れ、主要な新聞社にFAXを入れ、Webサイト「ハートフルランナーズ」に質問状の全文をアップし、その2日後には日本体育協会で記者会見を行っている。



世界陸上北京大会のマラソン代表に選ばれ、会見でポーズをとる今井正人(左)と前田彩里＝2015年3月11日、東京都新宿区(丸山和郎撮影)

市民マラソンフォーラム2015では、緊急企画としてこの代表選考のテーマを取上げ、「私も言いたい！ マラソン代表選考かくあるべき！」と題したパネルディスカッションを開催した。ほとんど面識のない方々に趣旨をお話し、ご参集頂いて実施にこぎつけたのである。今回の内閣府に対する行政訴訟も、予定の行動の範疇ではあるが、タイミングを見計らったことである。

勝負事は瞬発力が大事である。ここぞという時は、覚悟を決めて相手の懐に飛び込む覚悟が必要である。

陸連の代表選考はドーピングと同じだ

最後に、我々がマラソン代表選考問題と闘わなければならない理由について述べておく。

人間の社会は競争がなければならない。競争があって、強いもの、知恵のあるものがリーダーになれるようなシステムでなければ、社会全体が滅びてしまう。酷なようだが、生物は環境の変化に順応して変わり続けなければならない宿命にあるのである。

競争社会は公平性が担保されて初めて成り立つ。なぜなら、本当に強いもの、本当に知恵のあるものが明日を切り拓くために生き残らなければならないからである。公平性という美学を究極まで高めたものがスポーツであり、公平性を逸脱する様々な誘惑と明示的に対決しているのがスポーツである。公平性こそスポーツの魂である。公平性が担保されているからこそ、スポーツは輝き、魅力に満ちている。そして、スポーツにおける公平性に対するたがが緩むと、社会を精神面から蝕み始める。

昔を振り返ってみよう。野球のドラフトにおいて、「空白の一日」の江川事件があった。清原・桑田事件というものもあった。清原選手が巨人との日本シリーズの終了直前に見せた涙を見ると、ドラフトが彼の人格形成に大きな影響を与えたことが伺える。執筆時点の16日、彼は覚醒剤取締法違反の疑いで拘留中だが、あのドラフトが現在の事態の遠因になっているのかもしれない。

角界では、一度の優勝もなく横綱に昇進させた「北尾事件」があったが、その後の経過は皆さんがご承知の通りである。

代表選考問題の渦中にあった重友選手の世界陸上2015や大阪国際女子2016の結果に、内心、ほくそ笑んだ人も少なからずいたであろう。日本が一つにまとまっていない証拠である。一つにまとまっていない日本が勝てるわけがない。足の引っ張り合いで選手が力を発揮できる訳がない。そんな日本にした全ての責任は陸連にある。不公平な措置は選手のやる気も才能も奪っていく。そして人生をも狂わすのである。陸連は、裁量の範囲を逸脱した代表選考が選手を潰し、社会を蝕んでいることを肝に命ずるべきである。

ドーピングは不適法な方法で特定の選手が優遇される行為である。陸連の代表選考はドーピングと同じである。つまり、スポーツの規範となるべき陸連が率先してドーピングを行っているのである。

マラソン代表選考問題で日本人の知性と品格が問われている。陸連の今日の状況を看過するようであれば、日本の陸上界だけでなく、日本に未来はない。私は、Webサイト「ハートフルランナーズ」でフェアタイムを提供すること自体が、日本人の知性と先進性を世界にアピールすることになると思っている。そして更に、フェアタイムが世界に普及することになれば、その原点となった日本は永遠に世界でリスペクトされることになるであろう。

陸連がフェアな体質に変わり、多くの才能ある若者が陸上競技に取り組むようになれば、日本は世界に冠たる陸上王国になる可能性は十分にあると思う。更に先進的なシステムを世界に先駆けて導入し、世界標準の姿を示すような国になれば、世界が日本を見る目も変わってくるだろう。陸連は、目先の利益、内輪の論理で動くのではなく、高い理想を掲げて世界と闘って欲しい。

私の主張や活動に賛同して頂けるかたがおられたら、是非ご連絡ください。「フェア」、「クール」そして「ハートフル」な未来を切り拓くために、ともに闘いましょう！



いけがみ・たかのり 東京大学大学院工学系研究科助教。大学卒業(物理)後、プラントエンジニア等を経て東京大学生産技術研究所で画像通信、同工学部精密機械工学科で「光応用計測および知能ロボットの研究」に従事。工学博士。フルマラソン完走は100回以上。アテネ五輪マラソン代表選考における非科学的で不公平な選考の実体に激憤し、異なる測定系下の測定値を規格化する「仮想測定系システム」を発明(国際特許)。2006年よりWebサイト「ハートフルランナーズ」を立ち上げ、マラソンの記録の規格値である「フェアタイム」を提供。国際大会の記録の規格化、「フィニッシュタイムの相互変換」などを進める。